

鬼塚光政教授を偲ぶ

本学名誉教授 稲 別 正 晴

鬼塚光政先生はこの数年間、研究と院生の論文指導のために元気に中国各地を飛び回っておられました。ところが2005年11月に先生をリーダーとする大連日系企業視察旅行実施の直前に、体調不良のため入院して検査を受けなければならないので残念ながら参加できないと、連絡を受けました。それからわずか半年、先生が病魔に冒され他界されてしまうとは誠に痛恨の極みであり、このような形で献辞を捧げなければならないことは無念でなりません。

先生は大学紛争後に設立された経営学部のスタッフとして招かれ1973年に就任されました。私とは年齢も比較的近く、また先生の正義感の強い薩摩隼人としての性格とも合い、それ以来先生とは公私とも親しくお付き合いさせて頂きました。

鬼塚先生は様々な要職につき大学に多大の貢献をされましたが、ここでは私自身先生から大きな影響を受け、また経営学部にとっても大きく貢献された若干の事柄について述べ、先生を偲びたいと思います。

経営学は実業の学でありながら日本では現実の企業経営の営みと大学の研究との間には必ずしも十分な交流がないという事情がありました。このような状況は設立間もない本学経営学部でもそうでありましたが、経済学の世界から経営学の世界に入った私にとってもそれは不思議ではありませんでした。しかし、九州生産性本部で働いた経験をお持ちの鬼塚先生は現場を知ることの重要性を人一倍ご存じで、そのことの意義を鬼塚先生からことあるごとに教えて頂きました。

鬼塚先生はよくゼミ生を工場見学に引率されましたが、教員のための工場

見学もしばしば企画され私も参加させて頂きました。この工場見学は私にとっては極めて新鮮であり、現場の見学や工場側の人達からの話は大変興味深くまさに経営学の素材を見る思いでした。

このように鬼塚先生から教えて頂いた企業の現場から学ぶということは、私の海外研修中における本田技研工業(株)のアメリカ オハイオ州の工場（HAM）訪問（1991年秋）を機に大きく広がることになりました。それは帰国後鬼塚先生に、当時HAMの副社長であった網野俊賢氏の興味深い話を是非桃山で他の先生方にも聞かせたいと相談したことが始まりでありました。鬼塚先生の賛同を得て網野氏を囲む研究会を開催したのは1992年の5月でした。この研究会に参加された先生方も網野氏の報告に大変興味を持たれました。そして私が数年後に還暦を迎えることもあり、鬼塚先生からこれを契機にしてこの際「ホンダの米国現地経営」について共同研究をしてはどうかという提案がなされました。このようにして本学経営学部の教員を中心とする「ホンダの米国現地経営」についての研究プロジェクトが発足することになりました。

研究プロジェクトが最終的な成果を得るまでには予定以上の時間を必要としましたが、この間海外を含む多くの関連工場を訪問・ヒアリングをすることになりました。そしてこの工場見学に関しては生産管理を専門分野とする鬼塚先生に中心的役割を果たして頂きました。これらの中には二度にわたるホンダのオハイオの工場や部品企業の訪問・ヒアリングやロサンゼルスアメリカ・ホンダとディーラー、英国スインドン工場、アジア・ホンダとタイ工場への訪問・ヒアリングがあります。工場見学はそれなりに準備があり大変でしたが企業側の協力もあり、チームとして取り組むことができ大きな成果を挙げることができました。またこの共同作業の過程では研究以外にも色々な貴重な体験をすることができました。

ホンダについての研究が一段落した後、今度は鬼塚先生をリーダーとした「自動車を中心にした在中国日系企業」についての研究プロジェクトが発足しました。このプロジェクトでも鬼塚先生のお世話で、広州本田や天津のト

ヨタの工場、台湾の国瑞汽車などの訪問・ヒアリングを行ってきました。しかしこの研究が成果を生む前に鬼塚先生が病に倒れられたのは誠に残念であります。

これらの一連の工場見学・ヒアリングを通じて、私を含めて多くの経営学部の先生方が学んだことは計り知れないものがあり、研究・教育両面での貴重な財産となっています。

私が鬼塚先生を敬服する上で挙げなければならないもう一つの点は学生や院生に対する献身的な指導であります。従来もゼミ生の工場見学など熱心に指導されていましたが、経営学研究科が設置されてからは私が「先生は面倒を見すぎですよ」と冗談をいうほど先生は熱心に院生の指導にあたられました。事実、院生の日本のディーラー研究や中国における日系企業研究における先生の熱心な指導を見ていて時には健康を損なわれるのではないかと心配したほどであります。近年は先生の指導を慕って修士課程での先生の演習には留学生を含めて多くの院生が集まっていました。

さらに鬼塚先生は人間関係を大変大事にされていました。企業との相互交流が円滑に進むには何よりも相互の間の信頼関係の確立が欠かせません。この点で先生は常に誠意を持ってあたられるために企業の人達からも大変信頼され、先生の努力のお陰で交流が円滑に進んでいました。また、先生は在職中オレゴン州立大学とミシガン州立大学へ在外研修をされましたが、先生が現地で知り合われた先生方が日本研修で日本を訪問する時のお世話や、あるいはそれらの人々を通じた多くの人々のネットワークの広がり到大変貢献してこられました。そしてこの人々のネットワークは今も役立っています。

思い返せば先生との間には色々な懐かしい思い出があります。登美ヶ丘キャンパスにいたころ鬼塚先生が将棋に熱中していて、私もヘボ将棋ながらよく相手をしてもらったことがあります。ある時期、二人でよく遅くまで研究室で将棋を指していると、守衛さんが定時の見回りにきて「また将棋ですか」と半ば呆れられていました。そうすると二人は「そろそろ帰りましょうか」と終わりにするのですが、そんなことももう二度とできなくなってしまい

ました。

先生は、自分は心臓が悪いから長生きは無理でとても60歳までは生きられないと、よく口癖のように話されていましたが、二度目の大手術が成功してそれまでよりうんと元気になられただけに今回突然病魔に倒れられたのは未だに信じられない思いです。今はひたすら先生のご冥福を祈るのみであります。